

丘人 第四號

十月の會報を讀みて

K、C

十月の學友會報を讀みて多くの周匝なる研究の結果に敬服したるに共に、又一方甚だしく感かされたる一事あり。精緻なる研究に對しては今茲に云爲せんとするものに非ず、その甚だ遺憾に思ひ吃驚禁じ得ざる點につき聊か苦言を呈せんとするものなり。

讀者の既に感ぜられたるならん如く多く哲學種の問題の收められたることは注目し得ず。思想は時代を離れて存するものに非ず常に當面の問題に對し、而も其の時代思潮に制約せられるものなることは史實に徴し明かなる所なり。現代は哲學の時代である、哲學なくして考ふべからず思想迷途の今日に於て迷へる人々を照らすものは或は哲學であらう。自分は哲學問題の多きを以つて非ざるものではなく却つて推獎せんとするものなり。勿論本校は商業的高等の知識を授くる所なるは心せざるべからず、然れども實業家又人たり、而も其人たる現實の煩雜に悩み、或は凡ゆる周圍に驚異の眼を向ける人間なるを思へば哲學決して捨つべきではない。

んとするは社會進歩の爲め眞に苦心に堪えざるなり。學生亦卒業後の就職如何のみ顧慮して欲する學に逡巡し右顧左眄するに至りては國家の將來前に憂慮すべきなり。

學校は基礎を築く爲めのみ、頭腦を練る爲めのみ在學三年、四年の實業専門の教育のみにて果して如何ばかり實地に適するや。殊に實地學習に由なき現時の教授法に於ては、學の天地の無限に廣袤なるに於ては、此點より實地を學校内に取り入れんことも生ず、嘉す可くして、又一考の餘地残り、更に夫れには限度存す。舒上の思想は學の學校に盡きたりなき我邦の理想に胎動す、遂に學の生涯なるを納得すべく、直前の問題につきては更に特別の研究をなすの用意あるべきなり。同様の理由を以て藝術的方面も推し得るを得ず。人性の必然に根生せるものなればなり。經濟哲學亦築つべきにあらず、夫れは實地に應用せん爲めに非ず、學の學たる所以なればなり。筆は走りて本論の中心を脱せしと雖も聊か平素の所懐を述べ得たるに共に、併せて源泉を探りつゝ本評論の中心に出でたるを覺ゆ。

思辨なりと信ず。自分の手押せんとするは夫れに非ず、他なり、論者の及を以つて疑すれば即ち曰く、文章に囚へられたるなり。換言すれば論構斷片的にして統一無きことなり。先人の思想を引くに當り、筆者自身果して能く理解咀嚼してせるものなりや、筆者の腹中已に混沌たるものゝ當然一場の夢と化すは必せり。

新くては學的價值何等あることなきなり。難解なる文を草するを以つて得たる現代の風潮に走れるには非ずや、更には執拗なる文字を以つて殊更に文意を晦澁ならしめんことを以つて其の意味する内容一貫せるに於ても尙可からざるなり。されど誤る勿れ自分は文章の線を履せんとするものに非ず。讀者或は之等の論說に對し自己の哲學的素養乏しく以つて我れのみ解し得ざるものと敬遠し、口を噤して自過せるにはあらざるや。思想の高遠意味の幽玄にして解し得ざるに於ては實は讀者にあり姑く頭を垂れ黙して我が學を磨かんのみ、筆者から解し得ざる、或は執拗なる文句を挿入して思想の探源を術はんとする「ad hominem」に至りては學の恢宏真理の旨遠より甚だしきはなし。此の傾向論じて排世せざるべからざるなり。(全部の傾向論につきて云ふにあらず一部につきては敬意措かざるものあること上記する處) 敢て立つて此の文を草す學を愛するが故に外ならざるなり。妄評多謝(一九二四・一・二三)

此の論反響なしとせず。筆者の實際の器名なきを惜しむ。(委員)

月見君の「賃銀と價格」を駁す

革勢暗鐘

十一月號(七頁)で同君の原文を讀んだ。何か僕には其文に思はれてならぬ。何か書いてみた折だつたので一文を草した譯だ。彼は賃銀は勢力に對する價格に非ずと云ふ論議の下に立つて労働問題は非難なりと云ふ結論をしてゐる。曰く

等は人を離れて存在するからだ。(但し生産に參加する場合を除く)。然し勢力には價格はない。之を生産の用に供せん爲又は他に轉賣せん爲に賣買を行ふ事に事なる故にそれは人間の賣買を行ふと同じ事になる故に全然不可能だ何者人と勢力とは不可分なれば。即ち彼は勢力は商品に非ずと云ふ事を勇敢に主張する。成程

勢力は人と不可分だ。労働は全く労働者の生命の活動だ。然も彼等は生命活動を他人に賣る。獨立な人格を提供して賃銀と換える。『生活資料に替へる所だ。』。假んとして此以外に與ふべき何物もないのだ。換言すれば勢力を體化した商品は持ち合せぬからだ。故に生きたる唯一の方法は血と肉で盛られた人間一定を投出す事だ。そこで彼等と賃資本の持主とは法律上對等なる商品の持主として市場に現れて労働契約を結ぶ。資本主義道徳は何等之をさかめぬ。之を以つて賃銀は勢力の對價なりとは云はない唯資本私有制の存する限り労働者は賃銀奴隷たるは前述で明になつたと思ふ。生命活動を賣つても奴隷でない所以は一定時間のみ資本主義階級に所有せられ其時間後は所謂自由なる労働者たるに止まる。其時間後初めて自由自らを處分し又賣らんとする勢力を養つてゐる、實に生命の流である労働は彼等に對しては生存の爲の一手段に過ぎぬ。労働其物は彼等の生活には非ずして生活の犠牲だ。彼等が自分の爲に生産するのは其織り出す絹布でもなく、其織り出す金塊でもない。只生活資料を代表する賃銀のみだ。絹布や金塊は労働者に取り木細の若物、裏長屋、酒になつてくれること云ふ外は何の意味もない。現在の事實は此通りだ。彼等は資本家の賃利手段たる事はあまりに明白だ。悲しい哉勢力は、生産原料器具機械類と共に同列に計算せられてゐる。之が贖つた考へださるゝも現在の賃銀の真相だから止むを得ない。

次に「生産に當らしむる」とは人對生産であつて人對人ではない。故に其處には何等の交換はない隨つて勢力に價格なしと。考へてみたまへ。賣つてこそ労働者は生産に従事する事を得る。勢力が生産に參加して

「資本及び土地には價格は存在する。何者此

と見てよろしい。そこで競技はボールを奪合ひするに努むる。ボールを奪つた側は之を前進させる事に努力する。即ち攻撃に立つものである。奪はれた側は之を喰ひ止めて再びボールを奪合ひの状態に戻さうと努力する。即ち防禦に立つものである。競技者の方もボールの奪合ひを主たる仕事とする者も奪つたボールを持つて居る者に區別する事が出来る。勿論十五人の中誰が何方の仕事をやつても差支ないが普通奪合ひをするのは八人での之を、オワードと云ひ、後七人はボールを奪つてから又は奪はれてからの仕事を専門にする。此七人を總稱してバックメンと云ふ。初めて競技を見る人も直ちに気が付くであらう、度々敵味方の多数が一所に密集して丸で重なり合ふ様にして争ふ場合がある。又一旦競技を中止して双方のオワードが別々にカツチリ組合ひ更に其二つの塊が丁度力力の四つの様に組んで押合ふ場合がある。此二つの場合の密集團を何れもスクラムと云ふ。之が即ちボールの取合ひなのである。前の場合はボールの在る場所に双方のオワードが密集して其ボールを取合ふのである。後の場合は新しく組合つた後に横からスクラムの中央にボールを投げ込んで之を取合ふのである。斯くオワードがスクラムを組んで居る間にバックメンは後方に少し宛退つて待つて居る。ボールが何れかの側に取られると直ちに攻撃防禦が初まる後に待つて居たバックメンの一人が其れを持つて喰ひは走り喰ひは蹴り又は味方の他の一人に投げ與へる等ルールに許された有ゆる方法を盡してボールを前進させる事に努める。其時オワードは直ちにスクラムを解いてバックメンの仕事を助ける。防禦側のバックメン並びにオワードはボールを持つて居る敵を捕へてボールを其處に固定させる事に努力するのである。此「ボールを持つて居る敵を捕へてボールの運動を止める」ことをタックルと云ふ。斯くしてボールが止れば直ちに其處にオワードが密集してスクラムを形成し次の奪合ひに入るのである。

三、主要な規則
 競技を支配する最大な規則、之が無ければ

ば全くラグビーの現在の形は生じないと思はれる様な大きな規則は四つある。其一是オワードの規則である。之は競技時間全體を通じて適用される最重要な規則である。其根本の精神は簡單である。要するに「ボールを持つて居る味方より前方に出ない」と云ふのである。而して此オワードの規則に依ればスクラムの場合には絶対にボールより前方に出づる事を許されない。又敵の側からスクラムに入る事も許されない。スクラムの無い場合は甲なる競技者よりも後方にある甲の味方の一人がボールをブレイクした時甲はオワードである。云ふ。オワードの競技者はボールに觸れる事を許されない。又ボールを受け又は拾はんとする敵に十碼以内で近附き喰ひは十碼以内で故意に居残る事も禁ぜられて居る。此オワードの競技者は次の四つの場合にオンサイドとなる。

- 一、ボールをブレイクした競技者がブレイクした後甲よりも前方に出た場合
- 二、オワードに非ざる甲の味方の一人が甲よりも前方に於てボールを持ち又は觸れたる時
- 三、敵の一人がボールを持つて五碼以上走りたる時
- 四、敵の一人がボールを受け得ず單に之に觸れたる時

第二の重要な規則と云ふのは、バックアップの規則である。之は競技者がボールの取合ひの状態にある時適用せられる。タックルによつて固定されたボール又はスクラムの中にあるボールは直ちに手を以て拾ひ上げ又は故意に手を觸れる事を禁ずるのである。此規則がある爲めにスクラムに於けるボールの取合ひは脚のみで自分の方へボールを推出するのである。第三と第四はスクラムの無い時を支配する。第三はパスの規則で攻撃側の行動を制限するものである。ボールを持つて居る競技者は其を蹴る事は全く自由で何れかの方向に蹴つてもよいが之を手を以て投げた時には自己より僅でも前方に向ふ様な方向に投げる事は出来ない。斯くして前方に投げる事をスローキック、オワードと云ふ。投げる許りではなく手又は膝から

上の體の部分でボールを前方に叩き遣る事も出来ない。之をノックオンと云ふ。又ボールを受け取れてコロコロと前に落ちたのはスロウキック、オワードと見られる。此項の規則が犯された時はレフエリーは一旦競技を中止せしめてその反則の場所をスクラムを組ませる。第四はタックルの規則である。ボールを持つて居る競技者を捕へる事は出来ない。ボールを持つて走つて居る競技者でも手で捉へ得るだけである。足で引掛ける事は出来ぬ。以上四つの規則の中第三の場合を除き之を犯せば其反則の罰がフリーキックを得る。之は其反則の起つた點の真後から全く自由に蹴るのである。此時フリーキックを得た側の競技者はボールが蹴られるまでは蹴者より前方に進む事は出来ない。又反則した側の競技者はフリーキックマークより前方に出る事を許されない。

次に是非必要な規則はボールがフィールドオワードから外に出た場合である。ボールを持つて居る競技者が出てボールが出たのと同じ事になる。第一にタッチへ出た場合には出した方の反對側の一人がボールの出た點に於てタッチラインに直角に投げ込むのである。其時は其投げ込む點が敵味方の境界となり双方とも其點より前方に出る事は出来ない。之をラインアウトと云ふ。通常オワードが各一列に並んで投げ込まれたボールの取合ひをする。第二にボールがタッチインゴール(ゴールラインより後方のタッチ)に入り又はタッチドゴールラインを越えた時はボールを出した者が其インゴールに屬する者なるか反對側の者なるかに依りて異なる。其インゴールに屬する者なる時はゴールラインから五碼離れたフィールドオワードの中でスクラムを組む。反對側の者なる時はドロップアウトと云ふ事となる。之は二十五碼線(ゴールラインより二十五碼離れた線)を兩軍の境として攻められて居る側の者がドロップキックと云ふ蹴方で蹴返すのである。之はボールを落して其地面に反照して上る瞬間を蹴るのである。ボールがインゴールに入つても誰か上其を手で地面へ附ける迄はフィールドオワードにある

と同様競技は續行される。攻めて来た側の者が手で奪ければトライであり其インゴールの側の者が奪ければタッチダウンとなる。ボールをインゴールに入れた者が敵であるか味方であるかに依りて異なる事は全く前のタッチドボールの場合と同じである。其インゴールに屬する側の者が入れたものなる時は五碼スクラムとなり敵が入れたものなる時はドロップアウトとなる。

次に競技に用ひる蹴方が四つある。キック、ナブ、パンチ、キック、ブレイク、キック、及び前述したドロップキックである。キックオフはフィールドの中央にボールを置いてレフエリーの笛を聞いてから蹴るのである。之は競技の始め休憩後の始め及びトライ又はゴールイン(後述)の後に行はれる。ボールが蹴られるまで蹴者側はフリーキックラインより十碼の距離にある線(ハーフウェイラインより十碼の距離)にある線(ハーフウェイラインより十碼の距離)に於て蹴る事は出来ない。又キックオフのボールは此十碼線に達しなければならぬ。パンチキックはボールを手から落して地面に達しない前に直接に蹴るので試合中最多く用ひられるのは之である。ブレイクキックはボールを地面に置いて蹴るのでボールを高く蹴る者は必ず別の人でなくてはならぬ。

四、得點

得點をする場合が四つある。

- (一)トライのゴール成功の時……三點
- (二)トライのゴール不成功の時……三點
- (三)ドロップゴール……三點
- (四)フリーキックのゴール……三點

トライをした側は其トライをした點を過りゴールラインに直角の線上任意の所よりブレイクキックを試みる権利を得る。之がゴールに入れば五點である(此時はトライの物は點にならない)ゴール不成功ならばトライ及び三點になる。ドロップゴールと云ふのは試合中隨時處所からドロップキックでゴールに入れた事である。パンチキックで入れては何にもならない。フリーキックは如何様なキックをしてよいが得點する爲めにはドロップキック又はブレイクキックでゴールに入れた事を必要とする。ドロップゴールの場合フリーキ

ツクの場合ボールに入らなかつたらば競技は其儘行される。一方の側が得点をした時は反對側がキックオフをする。前項主要な規則の所で相手方が反則をした場合にフリーキックが與へられる事を述べたがフリーキックを得るのに他の一の方法がある。フエアーキック之である。敵のキックスローキックフワード又はノックオンしたボールを直接手にて受け同時に踵を以て地に印を附け「マーカ」と叫んでフリーキックを要求するのである。此時は其點をマークしてフリーキックが與へられるが此場合のフリーキックに限り其フエアーキックをした人自身が蹴るのである。

尚ほゴジションに就いては後に詳述する積りであるが前述したバツクメン七人の二人のハーフバツクメン四人のフリーキックが、バツクメン一人のフルバツクメンがあるフリーキックは攻撃防禦の主體でありハーフはフワードとスローキックの聯絡を築リゴールバツクメンは最後の防禦線形成する。(未完)

傷ける花の心

虎げの日より
はかなくも
破れはてつる
小さき花の心。
雨晴れ
風落ちて
今宵
更生のしどまに
唯悲しさに
よよま泣く。
あまりにも
痛ましく傷ける
小さき花の心よ。

一三二一

西班牙語科へ

天橋を前にして魅する四つの眼が西班牙の未來を暗示してゐました。兄は十二、妹は七つであつたでせう。毎日演で合ふ二人の語り草、西班牙の神秘そのもの、千八百九十八年、彼等の母國へと参りよす。千八百九十八年の Constitution 以來西班牙は轉起の方向に向ひました。今その指導者をも云ふべき人々の名を並べる事は止めませんが、彼等の起した理想主義的運動は久しく眠り來つた西班牙の國土に再生の投樂さならなかつたでせうか。詩と音楽と美術の國、闘牛とダンスと熱狂的信仰の國。今日を樂んで明日を忘れ、感情の奔放に身を委れて唯強き剣戟のみ求めた國民も今醒めやうとしてゐます。享樂の方法を誤り道徳を無視した國民は今其の害悪に目醒めつゝあります。橋立で巡り合つた兄が未だ見ぬ故國を語つたその時の意氣は熾なものでありました。愛國心と富に對する欲求を彼等の中に知つた私は、その昔遠く金を求めて海を渡つた人々を思ひ起させました。けれ共今日では一攫千金に非ず科學の應用と勞動による事を知りつゝある西班牙人は文化と進歩を認む事維新に於ける我が國民の如くであります。殊に大戰以來經濟的發展は商工業の發達と人口の都市集中文化的設備の目覺ましい増加として報せられてあります。又精神的方面では自由主義運動が他國よりも盛である様であります。

西班牙人の國民性日本人のそれとを比較研究して以て日本の將來を警告したり、西班牙の美術文藝音楽宗教等の大體を知る事は興味あるものであります。又南米移民の高唱される今日西班牙語は實務的に其の必要を増しつゝあります。殊に今申しました再起の機にある西班牙の將來を見るべきものであります。

最後に學校で私等が用ひた「トリアアルガール」の著者「ペレス、ガルドス」を紹介致します。彼は千九百二十年に死にましたが西班牙振興の爲めに奮闘した數ある文學者の主なるもの一人でありました。彼等仲間の中には空想に走り過ぎた様な人々もありましたが「彼やバカラ」や「アンリ」は専ら西班牙の實

情の紹介と職業的階級の揭揚に力めました。彼の好んで書いた。戦争や盜賊物語にも亦現實主義的色彩が濃厚であります。彼の著書の半を埋める「エヒソアアイカス、ナシチナレス」の偉大さは戦争や將軍や大政治家が端役を没してしまはない所にあると云はれてゐます。彼はかうした著書に思想界に對する一方悪い教育と悪い政府と誤つた信仰に對する眞面目な反逆見でありました。かうした人の小説を讀んでゐると何となく我々西班牙黨には心強い感じがします。其の他今は商業通信も習つてゐますが佐藤先生の行き届いた御親切と御熱心にはいつも自分の怠惰を恥ぢるばかりです。以上私は西班牙事情と我が西班牙科を簡単に御紹介して今度本一になられる諸君に西班牙語をお勧め致します。(日生)

三色の戀

萬木 郁

夜のさびりをちりばめた
赤、黄、昏の灯のいろ
其の光に照らされた燃の諸相
樹かげにのれる甘いまよき。
公園のアーカ燈の青い光には蛾が集ひ寄る。
二つの黒いかげが闇に寄り添ふ。
舗道を軽く踏むフェルトの草履、
掛け流したシヨールに包まれた斷髮の白い頭、
手と、胸に石の鋭い閃光、
高い笑ひを飾、癖の黄色い光にひとかせて
手を組んだ二人は軽い足取りで行く。
暖爐の焰は赤く燃え盛り二人の半身を照らし出す、
空虚をみつめる其眼には涙が淡く光る、
或る感激の後、
靜かにその手はふれる。

蹴球部

全國中等學校蹴球大會

秋晴れの日も麗かな十一月十五日より十七日に至る三日間所界の一機感たる本校主催大朝社後援の第四回全國中等學校蹴球大會は華々しく催された。
集るもの十有七校京阪神の諸寮に加ふるに南よりは海草中學西よりは廣島一中の馳せ來たるあり鐵脚の勝ふ所火花を散らして或は壯烈な噛む男性的肉體戰を演じ或は血を沸かす様な長激戰を演じ若人の意氣は迸りて激戰又激戰遂に榮ある優勝旗は再び神戸一中軍の手に歸し二年連勝の譽を擡にした。

第一回戰

高商グラウンド

A 京都師範	一	甲陽中學	零
B 神戸二中	三	桃山中學	零
C 神戸一中	十一	關西普通部	零
D 池田師範		天王寺師範	棄權
E 中クラウンド			
F 海草中學	一	神戸商業	零
G 姫路師範	一	明星商業	零
H 廣島中學		大慶市立工業獎勵	
I 市岡中學	不戰一勝		

第二回戰

A 神戸一中	四	池田師範	零
B 京都師範	三	市岡中學	零
C 姫路師範	四	神戸二中	二
D 廣島中學	三	海草中學後半棄權	
A 京都師範	一	姫路師範	零
B 神戸一中	二	廣島中學	一

優勝戰

神戸一中 二 京都師範 零
三度戰つて三度勝ち相見えた兩軍は意氣愈々昂い一中は過去二回の戰に京師に勝を譲つて居る一中よく恨みを盡か京師常勝の譽れを翫々高くするか興味は深い意氣の戰である。前半一中始めより攻撃の銳鋒を繰めず

